
肉ジャガ

出口 常葉

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

肉ジャガ

【Nコード】

N6708C

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

日曜日の朝、僕は朝食の支度をしていた。そこへ友人の柳沢がやってきて、さも当然のように朝食をとり始める。友人の結婚話と、その嫁の作る料理の話が聞かされて、僕はふと昔のことを思い起す。それは、酷い見た目の肉じゃがを作ったかつての恋人との思い出。

第一話

日曜の朝、コトコトと鍋が音を立てている。蓋の隙間から鰹出汁の香ばしい香りと白い湯気が、音に合わせて立ち上っている。火を止めて蓋をあけ、鼻歌混じりに味噌を溶き入れていると、調度炊飯器が炊き上がりを知らせるアラーム音を鳴らした。

一人暮らしもいよいよ十年目の大台に乗った。始めたての頃は、不安だらけで眠れぬ夜もあつたりしたが、もうすっかり僕の肌に馴染んでいる。逆に、誰かと一緒に暮らすのが窮屈に感じるぐらいだ。あまり良い傾向じゃないかもしれないけど。

毎朝五時半に起床して、軽い散歩。それから身支度を整えて出勤。平日は朝食を作る余裕が無いので、大抵はコンビニでサンドイッチとコーヒーを買う。味気が無いのであまり好きではないけど、このあたりは致し方なしと諦めた。何事にも、一人でやるには限界があるものだ。

完璧とはいえないが、学生の頃を考えればあまりにも規則正しい生活サイクルは、さほどの苦労もなく身についた。正直、遅刻を連発したらどうしようと心配していたのだが、その点は杞憂に終わってくれてほつとしている。その代償として、こうして休日ですら体が勝手に目覚めるのはたまらないものがあつたりもするけど。

出来上がった料理をコタツの上に並べていく。そろそろ冬も近づいてきたから、とかではなくうちは年中コタツは出さなければいけない。テーブル代わりになっている。さすがに布団は出してないけど。

最後に冷蔵庫から、昨日のおかずの残りを取り出し、ラップをかけてレンジに放り込む。ヴーンという低い音と共に、レンジが回り始めた。中に入っているのは肉ジャガだ。

「おーす」

そう言いながら、柳沢の奴が部屋に入ってきたのは、まさに僕が

朝食を取ろうとした瞬間だった。見計らったかのようなタイミング。同じアパートに住んでいるとはいえ、あまりにも不自然。そういえば、こいつは今のところフリーターだったな……。

「おお、美味そうなもの食べてるじゃないか」

わざとらしい台詞と共に、平然と部屋の中に入りこんできた柳沢は、僕の向かい側に腰を下ろした。

「なんだ、また肉ジャガかよ。お前はそればかり食べてるな」

そう言いながら、無造作に芋を一つつかんで口に放り込む柳沢。文句があるなら食うなってんだ。こいつの言うとおり、確かに頻繁には作っているけれども。

「んー、美味しいね。さすがにしょっちゅう作っているだけのことはある。これなら、金を払っても良いな」

「じゃ、払え」

僕のつつけんどんな言葉に、柳沢は苦笑を浮かべた。払う気もないくせに、偉そうなことを言う。この十年の一人暮らしで、いろいろと料理は作ってきた。その中において、初めて作った料理であり、そして僕がもっとも得意とするのがこの肉ジャガだから、味のほうにはある程度自信があった。

「それにしても、何でそんなしょっちゅう作るんだ？」

「定期的に作っておかないと、腕が鈍るからな」

「どうせ食べさせる相手もないんだし、別に鈍ったって良いだろうに。他の料理は結構適当にやっているように見えるけどな」

ふざけているようで、嫌なところは見ている奴だ。今度は僕が苦笑を浮かべる番だった。

「意外と難しいんだよ。コツとかあるしな。忘れたら、もったいないだろう」

「ふうん……、まあそういうことにしておくか」

あからさまに信じていない柳沢。でも、意外と難しいのは本当のことだ。僕も料理を始めてから知ったのだが、おふくろの味なんて言われる料理に限って、気をつけなきゃいけないことが多いのだ。

「そついやさ、服部の奴、結婚するらしいぜ」

さらに芋を一つ口に放り込みながら、柳沢が懐かしい名前を口にした。服部は大学時代の同期だ。まだまだだと思っていたが、いよいよ周りも結婚し始める年になってしまったか……。

「へえ。めでたいな」

三十より前には結婚したいと、学生の頃から言っていた彼だから、そついう意味では夢が叶ったといえよう。未永くお幸せにやって欲しいが、その前におすそ分けも欲しい。結婚したいと強烈に思うわけではないが、両親の希望とか長男と云うことを考えると、結婚したほうがいいのかと思ったりもする。

「式は身内だけでやるらしいから、参加させてもらえないらしいけどな」

「……それは正直ありがたいかもしれない。働いていても、貧乏には違いない。支出が抑えられるのは、願ったりだ。」

「まあ、金が出て行かないのは良いことだよな」

柳沢も同じことを考えていたらしい。堂々と口にするのが彼の凄まじいところだ。

「んで、そろそろ白いご飯と味噌汁が出てきても良いと思うんだけど」

待っていたらしい。なんてずうずうしい奴。

「はいはい。ちょっと待っていてやがれ。正座でな」

ため息をついたところで、罰は当たるまい。僕は腰を上げてキッチンへと向かった。

「そついえばさ、服部の奴一つだけ不満があるんだと」

「ほう、贅沢な奴だな」

結婚できただけでも、ありがたいと思いやがれ。しゃもじを握る手に力が籠る。

「料理が下手なんだつてさ」

「何だよ、それぐらい。自分で作れば良い」

やや乱暴に味噌汁を注ぎながら、つい、吐き捨てるような物言い

になる。

「そりゃ、おまえ、できる奴の台詞だろう」

柳沢は半ば笑い飛ばすようにそういった。そんな奴はなかなかいないとでも言いたいのだろうか。

「僕だつて、ついぞ六年ぐらい前までは料理なんてしたことなかったよ。別にコツクになるうって分けじゃないんだから。普通に食べられるものを作るぐらい、ちょっと練習すりゃできるよ」

そういいながら、僕は柳沢の前に飯と味噌汁の入った器を置いてやった。ついでに割り箸も渡す。本当に正座している。意外と律儀なところもあるんだな。箸を渡した途端に崩したけど。

「お、悪いね。そんじゃ頂きます」

柳沢は早速箸を肉ジャガの入った器に突っ込んだ。牛肉、玉ねぎ、糸こんにゃくにジャガイモ。特別なことは何もしていない、面取りとか、アク取りとか、まあ細かいコツに気をつけるだけで、味は随分変わってくる。

「美味しいなあ。飯が進むわ」

遠慮なく箸を動かす柳沢。まあ長い付き合いなので、特に気にもならないし、美味しいといってもらえるのは単純に嬉しいものがある。しばらく食べるのに集中していた柳沢だったが、ふと思いついたように再び服部の話を始めた。

「服部の嫁だけだな、例えばこんな肉ジャガー一つとってもだ、芋は崩れる、肉は細切れ。玉ねぎは無駄にでかいし。見た目からして、食欲が湧かないって言うんだな。まあ、嫁さんの方も努力はしているらしいんだが・・・」

柳沢の説明に、僕はふと懐かしい記憶を呼び起こされた。

「・・・そういうのって、意外と食べてみると旨いよ。具材の味が汁に出てるし」

そういいながら、僕も自分で作った肉ジャガを一口。うむ、我ながら良いできた。ほっくりと煮えたジャガイモ、味の染みた牛肉。そして味付けの甘辛具合まで、大変納得のいく味だ。

肉ジャガ

「意外につて……。まるで食べたことがあるみたいに」
「うん、まあ……。昔ね」

そう、もう遠い昔のことのように感じる。僕が料理をするきっかけになったのも、やっぱり肉ジャガだった。あれをそう呼んで良いかどうかはともかくとして、それは同時にとても大切な思い出でもある。

第二話

彼女の名前は今村美智子と言った。僕より一つ年下で、美人ではないが愛嬌のある顔立ちをしていた。明るくて、人当たりもいい。知り合ったきっかけは、知人からの紹介だった。ネットの掲示板で映画か何かの話で盛り上がったのが始まりだった気がする。それが暫く続いた後、メールのやり取りをするようになった。そして直接会って飲みながら語ろう、という話になったのだ。何度かそういうタイミングがあつて、ある日二人の女性を連れてきた。そのうちの一人が美智子だったのだ。なんでも、その人は美智子の大学の先輩で、同じサークルに所属していたらしい。

知り合った当初から随分と話の合う人だと思っていた。もちろん、話の合う知り合いと同じサークルに入っていたわけだから、当然共通の話題はある。ただ、それ以外の、例えば食の好みや、出かけ先の傾向まで似通っていたから、当然のように話は弾んだ。

美智子のほうもどうやら同じことを思っていたようで、いつの間にか二人で遊びに出かけるようになっていた。

会わせてくれた男性とはその後も暫く、会ったりメールしたりしていたが、ある日外国に行かないといけなくなつたといつて、それつきり音信不通になつた。楽しい人だったので、残念に思ったが、その頃には美智子と付き合い始めていたし、やがてその人は記憶の彼方へと消えて行つた。

付き合い始めて、色々とあつて、あつという間に一年が過ぎた。四回生になつた僕は卒業論文という初めて出会う大きな壁を前に苦しんでいた。一回生から三回生にかけて、授業をそっこのけにしていた代償は意外と重く、正直卒業も危なかつた。四回生の癖に、週五でびつしりと時間割が埋まっているのはどうだろうか。どうもこつもやるしかなかつたわけだが。なぜならば、僕は大学院の試験を

受けて、ついでに合格していたからだ。これについては、既に三回生の始めごろには決めていた。親は反対したけれど、自分の蓄えを全て吐き出して、勝手に進むことを決めてしまっていたのだ。

「愚行の見本だな。うん、辞書に用例として書き加えておこう」

当時、僕と同じぐらい授業を残していながら、日々遊びまわっていた柳沢からはそんな気の利いたジョークまで言われた。ただ、そのジョークに対して、鉄拳を振りかざす暇が無いほどに忙しく、人生でも二度とないぐらいに死に物狂いだったことは間違いない。

美智子は当時三回生で時間が溢れているときだったけど、会う回数 は当然のように減っていた。

夏が過ぎて秋も深まりつつあったある日のことだった。その頃の僕と言えば、忙しさもピークに達し、コピー代や電車代で懐も寒く、まさに一人だけ冬の中にいた。

「コピーロボットがあつたら、借金してでも買うね」

こんな言葉が口癖になっていたぐらいだから、その忙しさも計り知れようと言うもの。そんな状況にあるから、当然美智子もほったらかしになっていた。相手をしてくれない僕に業を煮やしたのか、美智子は電話をかけてきて僕にこう言ったのだ。

「ねえ、遊びに行ってもいい？」

眩暈がした。昼は大学、空き時間は論文の資料集め。夜は先輩の付き合いで麻雀したり、酒を飲み連れ回されたり。部屋では寝るだけ、喰い散らかすだけ。そんな生活をしていて、部屋が綺麗なわけもない。正直、ゴミ捨て場のほうが日光を頻繁に浴びている分清潔だったと思う。

「えーとね、今は部屋がごみためだから無理」

「んじゃ、掃除して」

なかなか頑固だ。何しにくるんだろうか。適当なデートスポットを幾つかあげてみたけれど、そのときの彼女の意思は鉄よりも固かった。

「じゃあ、今度の土曜日。ね？」

有無を言わせぬ美智子の口調に、僕は了解してしまった。

電話を切って改めて部屋の中を見回した僕は、とにかく大きなため息をつくしかなかった。大体、この部屋の床は何色だったかな？ 今日が水曜日だから・・・猶予は二日しかないじゃないか。

それから大慌てで掃除を始めた。1Kという狭苦しい間取りの癖に、出てきたゴミはゴミ袋で七つにも上った。その隙間から出てきたゴキブリの数は・・・もう覚えていない。

溜め込んだ洗濯物も一度では洗濯しきれず、ベランダはたちまち洗濯物で一杯になった。そうやってまず溢れ返ったものを片付けてから本格的に掃除をして、結局丸一日掃除に費やし、どうにか人を呼べる部屋にした。ちなみに残りの一日は、僕自身を小綺麗に装うべく散髪やら何やらに費やした。何しろ、髪は括れるほどに伸びていたし、髭もろくにそっていないかったから、鏡で自分を見るのも嫌だった程だ。

土曜日、僕は駅にいた。ここで待ち合わせて、それから僕の家に向かう段取りになっていた。家に女の子が来るなんてのは初めてだったから、さすがに緊張していた。ついでに言えば、少し寝不足だった。

土曜日が丸一日潰れるので、金曜日の夜は少しでも資料をまとめおここうとして、頑張りすぎてしまったのだ。気がついたら朝の五時。約束の時間は昼前。十時ぐらいまでは眠れるので、五時間は眠れる計算だったけど、なかなか寝付けなくて、結局日が昇るまで起きていた。それからやっと眠れたけど、三時間ぐらしか眠れなかったのだ。普段ならそれでも良かったけど、何しろ連日の溜まった疲れのせいで、体は酷く重たかった。

駅の改札は休日だというのに人でごった返していた。暇人が多いなあ。そんなことを考えていると、改札機の向こう側で左右に揺れている手が見えた。見覚えのあるジャケットの袖口。視線を下にず

らすと、はたして美智子だった。いつもより少し大きめの鞆を肩にかけ、よたよたと人ごみに流されかけながら歩いている。彼女は改札を出てまっすぐに僕のところに来た。

「お待たせ、久しぶりだね」

「お疲れさん。待つてないよー」

家にいると、また寝てしまいそうだったから、僕が早く来過ぎていただけだ。美智子は見事に約束の時間通りについていた。

「よし、それじゃあ早速行こうよ」

嬉しそうに笑って美智子はそう言った。

「はいはい。ああ、荷物」

「あ、ありがとう」

美智子は素直に、差し出した僕の手を鞆を預けた。見た目よりは随分と軽い。

「凄く楽しみだね」

そう言いながら美智子は自由になった手で、無造作に僕の腕を取った。もちろん今まで手を繋いだ事が無かったわけではない。けど、そのときの彼女の仕草はとても自然で、何と言うわけではないが幸せを感じた。

「昼ご飯、どうする？」

僕が尋ねると、美智子は一瞬考える素振りを見せたが、すぐに返事をしてきた。

「家に行つて食べる。何かあるでしょ？」

そう言われて、今度は僕が考えるはめになった。冷蔵庫は空っぽだ。掃除の際に開けてみると、賞味期限が切れたものばかりだったので、全て捨てたのだ。

「インスタントラーメンしかないかも」

「それじゃあ、それでいいよ。お昼だし」

意外にも美智子はあると納得した。

「そのかわり、作つてね」

僕を見上げてくる美智子。

「いいよ」

作りなれたインスタントラーメンだし、味は決まりきっている。失敗の余地が無かったので、僕も気軽に了解した。

築数十年は確実に過ぎていいるであろう、古びたアパート。かろうじて鉄筋コンクリートなのだが、塗料はあちこち禿げ上がり、ベランダの手摺も錆が目立つ。見た目は一寸アレだけど、家賃も安いし僕は気に入っていた。

「なかなか雰囲気のあるところだね」

それが美智子の第一声だった。気を使っているのが一目で分かるほど浮かない顔をしている。まあ、無理も無い。

「ここの四階なんだ」

僕はそう言いながら、先に立ってアパートの中に入った。このアパートは両側に部屋があつて、その真中を廊下が通るといふ構造になつていたので、日中でも薄暗く、コンクリートが剥き出しなので音も響く。

「夜はちよつと怖いかも」

そう言いながら美智子は周りに視線をめぐらせた。

「蛍光灯が点くから大丈夫」

たまに切れてるけどね。と言うのは内緒にしておいた。美智子の浮かない顔はあまり良くならなかつた。まあ、蛍光灯がついたって怖いのは怖いのだろう。

「そうじゃなくってさ……」

「え？何が？」

「……いいよ、なんでもない」

そう言つて美智子は僕の手をほんの少しだけ力をこめて握つた。

第三話

僕の部屋は四階の一番奥にあった。

「着いたよ。お疲れ様」

僕はそう言いながら鍵を開け、ドアを開いて美智子を招き入れた。まだ昼間ということもあって、電気を点けなくても部屋の中は充分に明るかった。六畳程度の狭い部屋とお情け程度のキッチン。玄関のすぐ脇に小さなユニットバスがあつて、設備はそれで全てだった。部屋の中央には布団だけ外した、出しっ放しのコタツが当時から居座っていた。その周囲を取り巻くように家具が配置されている。

「ふうん、結構片付いてるね。これなら合格だよ」

美智子は部屋を軽く見回してそう言った。結構どころではないのだが、以前の姿を見ていない人にとつては、結構どまりのレベルと言ふことなのだろう。もともと物が多いから、そのせいもあつたかもしれない。

荷物を部屋の隅に置いて、ジャケットをカーテンレールに引っ掛けてあつたハンガーにかけて、美智子はいそいそとコタツの側に腰を下ろした。

「よし、それじゃあ早速ラーメンをご馳走になろうかな」

僕を見上げて彼女はそういった。

「はいはい、少々お待ちください」

そう言いながら僕はキッチンに立ち、鍋に水を張つて火にかけた。さあ、調理開始だ。などと、意気込んでみたところで所詮はインスタントラーメン。沸いた湯の中に麺を沈めてかき回すだけ。僕は油断すると飛び出しそうになるあくびをかみ殺しながら、鍋の中に突っ込んだ箸を動かし続けた。

それ程時間のかかることなく、コタツの上に湯気の立つ井が二つ並んだ。

「お待ちどうさま」

そう言いながら、僕は湯気の立つ丼を美智子の前に置いた。上にスライスチーズを乗せたスペシャルデラックス版だ。

「おお、美味しそう」

美智子はそう言ってニコニコしながら割り箸を手にとり、二つに割った。その隣のスペースに丼をもう一つ置き、僕も腰を下ろした。「いただきます」

胸の前で合掌し、軽く会釈をしてから、美智子はラーメンに箸をつけた。ずるずるっと小気味の良い音を立てて麺をすする美智子。旨そうに食べてくれる。

「美味しいね」

「それは何より」

実際のところは、誰が作ったって同じ味になるのだろうけど、その時は素直に嬉しいと感じた。

三十分ほどで昼食は終わった。丼を片付けた後、しばらくは他愛の無い話をしていた。映画のこととか、一人でいるときの休日の過ごし方、好きな旅行先などなど。まだまだ美智子の知らない部分が出てきて、新鮮で楽しかった。いつの間にか眠気もどこかへ去っていた。

やがて美智子は部屋の中の色々なことに興味を持ち始めた。始めに目を向けたのはCDを立てているケースの中身だった。

「何か、古いCDばかりだね」

並んでいるCDをざっと眺めてから、ちよつと不満そうに美智子は言った。

「別に良いじゃん。好きなんだもの」

「最近なので、お気に入りとか無いの？」

「んー、ゆずの夏色とか」

思いついた曲を適当に口にしてみた。その瞬間、美智子の顔がパツと輝く。

「うんうん、私も好き。いいよね、あれ。・・・新しくは無いけど」

「え？そうなの？」

「そうだよ。CD無いの？」

「ずーっと指でCDジャケットの背中を追いかけていく美智子。もちろん無い。」

「無いよ」

「買えばいいのに」

「それ一曲しか知らないし」

「買って見たら、他にもいい曲があるよ？」

美智子はそう言ってくれたけど、僕はまるで興味が無かったので肩をすくめて終わらせた。大体、「夏色」だつて思いついたただけだ。本屋でかかっている有線で何度か聞いたことがあって、いい曲だなと思っていたことがあった。そのあと、芸人とかが物まねして歌うような番組でタイトルを知ったのかな。

次に美智子が目を移したのは本棚だった。

「本がいっぱいあるよね。何冊くらいあるの？」

「何冊くらいかなあ。実際に数えたこと無いんだ」

本を読むのは昔から好きだった。一人暮らしを始めるに当たって、一番悩んだのは本の取捨選択だったほどだ。結局、段ボール箱で十箱までは減らしたが、それ以上はどうしても無理だった。

そういうわけだから、部屋の中にはもともと結構な量の本がある。それに加えて、当時、僕が大学で専攻していた国文学関連の書籍を総合すると普通のご家庭には無さそうな量になっていたことは間違いない。それでも古書店に売りに行ったりして、それなりに増加は抑えているつもりだった。

僕の返事に美智子は「ふうん」と呟き、それから熱心に本の背表紙を眺め出した。

「就職活動してる？面接の本とか持っていたら、来年借りるかも」

美智子は本棚を眺めながら、ふとそんなことを口にした。

「ああ、俺、大学院に行くんだよ。言つてなかった？」

僕が何気なくさういうと、美智子は少し驚いたような顔で僕のほ

うを見た。

「そうだった？忘れちゃった」

「そっか。多分、そっちのほうが先に就職するんじゃない？」

「そう・・・」

そういった美智子の顔は、心なしか悲しげに見えた。しかし、それも一瞬のことだった。

「いいなあ、一人暮らし。楽しそう」

しばらく本棚を見回した後で、美智子は再び腰を下ろしながら呟くようにそう言った。

「楽しいよ。美智子もすれば？」

何の気なしに僕はそう呟いた。大学の知り合いの中にも、何人か一人暮らしをしている女の子を知っていたし、やってみて分かったのだけど一人暮らしはやって置いて損は無い。

「うん、でも私、大学地元だしね。親が許してくれないんじゃないかなあ」

「厳しいんだ？」

「うん、家を出たいな、とは思っているんだけどね」

そこでふと沈黙が訪れた。何か言おうとしたけれど、それより先に眠気がやってこようとす。口をあけるとあくびが一緒に出てきそうだった。何とか目を開けながら黙っていると、美智子が再び口を開いた。

「そうだ。夕飯は私が作るからね」

美智子の口から出た突飛な言葉に、僕はかなり驚いてしまった。

「そうなの？てつきり何か食べに行くのかと」

「何？不満？」

そう言っ僕をじっと見る美智子は、いつもどおりの美智子だった。

「え、いや、そんなこと無いよ。ただ・・・」

「ただ・・・？」

「胃薬、あつたかなって」

僕がそういい終わらないうちに、美智子の投げたクッションが僕の顔面に思い切り当たった。

「バカつたね。仮にも彼女がご飯を作ってくれて言うんだから、素直に喜びなさいよね」

「はい、すみませんでした」

クッションを抱えたまま、僕は素直に謝った。目が、ちよつと怒っていた。

「んで、何が食べたい？」

美智子の問いに、しばし僕は考えた。そもそも、美智子は何が作れるのだろうか？料理が得意と言う話は今までに聞いていなかった。ついでに言えば、うちにある設備でどのぐらいのものが作れるのだろうか。料理なんてまるでしない僕には、イマイチ見当もつかなかった。鍋も包丁も新品同様だ。

「なんでもいいよ。作れるもので」

結局僕はそう答えた。

「むう、そういうのが一番困るんだよ？作ってもらう側はちゃんと考えないと」

この答えはアウトだったらしい。それでも一つため息をついた後で美智子はこういつてくれた。

「それじゃあ、ちよつとキッチンを見せてもらってもいい？」

悪いわけもない。二つ返事で僕は了承した。僕と美智子は連れ立ってキッチンに行った。見た目からして古びた狭いキッチンだ。料理をすることなんて、あまり想定していないのかもしれない。

美智子はまず冷蔵庫を開けた。

「わ、物の見事に空っぽね」

美智子はあきれたような、それでいて感心したような声を上げた。そりゃまあ、全部捨てたからな。冷蔵庫を閉め、それから美智子は調味料の棚をチェックし始めた。

「えーと、お塩、お砂糖、お醤油・・・、みりんは無いのね。あれ？このお醤油、賞味期限が切れてるよ。駄目よ、こんなの置いてち

「や

醤油に賞味期限があることを、僕はこのとき初めて知った。

「とりあえず、料理をしてないことは良く分かったわ。買出しに行かないと駄目みたい」

予想通りの結論だ。時間はたっぷりあるので、とりあえずスーパーに行ってから何を作るか決めようということになった。

第四話

アパートの外に出てみると、空はもう薄暗くなり始めていた。結構長い時間喋っていたらしい。秋の日はつるべ落としと言うから、日が落ちるのが早くなっているのは間違いないけど。

スーパーは何軒か知っていたが、すぐ近くにある安いところに案内した。丁度夕方のセールが始まったところらしく、店内は混み合っていた。僕が買い物かごを持ち、彼女の少し後ろからついていった。美智子はジャガイモ一つ買うにしても色々と呟いてチェックしながら籠に入れていた。結構細かいんだな、と僕は少し感心した。

「それで、何を作るの？」

先ほどから美智子はまるで決まっているかのように色々と籠の中に入れていたが、僕のほうは肝心の作るものを聞いていなかった。

「ん、肉ジャガ。得意だし」

どうやら彼女の中ではすでに献立が出来ていたらしい。僕に尋ねたのはなんだったのだろうか？

「なかなか家庭的だね。お袋の味？」

「ううん、我流よ。うちの親、あんまり料理しないのよね。心配？」

「とんでもない。とつても楽しみですよ」

僕がそういうと、美智子は満足そうに頷いた。

「それじゃあ、次はお肉を買いたいな」

僕は美智子の言うままにスーパーの中を案内した。新婚の夫婦とというのはこんな感じなのだろうか、などと考えてみたりもした。

「なんか、新婚みたいじゃない？」

そんなことを考えていた矢先に美智子にそんなことを言われ、僕は思わず言葉に詰まってしまった。

「・・・ああ、そうかもね」

歯切れの悪い返答。情け無いたららない。

結局、全ての材料に加えて幾つかの調味料も買わねばならず、荷物はかなりの量になった。僕は二つの袋にそれらを分けて入れ、両の手に一つずつ提げたけど、結構重かった。

「安かったね」

美智子はそういつて満足そうに笑った。残念ながら、このときの僕にはこういつたものの相場が分からず、ただ曖昧に頷くことしか出来なかった。今ならきつと激しく同意したことだろう。

実は、彼女にずっと聞きたいことがあった。今朝、駅で彼女を見たときから、ずっと気になっていた。

「今日さ、泊まってくの？」

恐らく分かりきったことだったのだろう。僕の問いかけに少し驚いたような表情を浮かべる美智子。

「・・・うん。そのつもりだったけど、駄目だった？」

彼女の心配そうな視線。

「いや」

僕は、何気ない風で返事したものの、実際僕の声は少し上ずっていたと思う。大きい目の鞆を見たときに、ひよっとしては思ったけれども生来のモテない病にかかっていた僕としては、なかなか確信が持てなかった。結局、選択肢もへたくれも無く、一発回答を貰ってしまったわけのだが。それを聞いて改めて照れくさいというか、そういう感情が湧き上がって来た。

部屋に戻り、台の上に買ってきたものを置いたところで、僕は早々にキッチンを追い出されてしまった。

「さあ、旦那様はコタツに入ってくつろいでいてね。美人の奥様が美味しいもの作ってあげる」

美智子は茶化した口調でそう言っ僕をキッチンから追い出した。僕は素直にそれに従った。

実家を離れて四年。愛の籠った手料理など殆ど食べてこなかった僕は、そういうものに飢えていたのだろう。ましてやコックが恋人

だ。おまけに「得意」な「肉ジャガ」を作ってくれるのだ。素直に従わない理由はどこにもないといって良い。

「出来るまで、覗いちゃいやよ」

キッチンを出際に、彼女は僕にそういった。僕は素直に部屋に戻って、コタツの側に腰を下ろした。残念なことにこのときの僕は自分で料理などすることが無かったので、彼女の鼻歌に混じって台所から聞こえてくる音が何を意味するかなど分かるはずもなかった。

暫くは本を読みながら、その音を聞いていた。そうしているうちに立ち去った眠気が再び戻ってきたのを感じた。

これはマズイ。さすがに、初めて部屋に来た女性に料理をさせておいて、別室で高いびきと言うのはいけないことだと、さすがの僕でも感じた。試しにテレビをつけてみる。どうでもいいバラエティ番組をやっていた。チャンネルを変えてみるが、時間帯のせいかわらエティやら退屈そうなニュースばかり。仕方なくテレビを消してコンポの電源を入れる。CDを再生してみると、入っていたのはよりにもよってさだまさしだった。眠気が加速する。

「ちょっと、その曲止めてよ。テンポが狂う」

おまけにキッチンからも苦情が来た。僕はリモコンでCDを止めた。眠気はますます強くなっていく。太ももの裏側をつねってみたりとか、とりあえずお茶を飲んでみたりとか、とにかく考え付く限り体を動かした。

「おまたせー」

キッチンから美智子が出てきた。眠気もすっかり引いている。良かった、どうやら寝ずに済んだらしい。僕はほうつとため息を一つつけた。

「はい、召し上がれ」

そう言っつて、美智子がコタツの上にどんと乗せたのは、立派な船盛り。それにステーキや寿司やご馳走だらけ。

「へへ、気合入れて作ったよ」

肉ジャガ

そう言って美智子はがっしりと僕の肩をつかんで、
がくがくと揺すぶり始めた。

第五話

「・・・君、ねえ、起きてっばー!!」

体を激しく揺すぶられ、僕が目を開けると、目の前に美智子の顔があつた。その瞬間、僕は迂闊にも眠ってしまったのだということに気がついた。美智子の視線が、僕を非難しているようで、激しい後悔が胸の中を渦巻く。妙にすっきりした頭が、逆に腹立たしい。

「あ、ごめん・・・」

「ううん、待たせちゃったから、ごめんね」

そう言ってくれる彼女の優しさが、かえって痛い。黙っているのも限界だった。

「違うんだよ、実は・・・」

僕は自分が寝不足であることとその理由を美智子に話して聞かせた。聞き終わった後の美智子の複雑な表情は、多分一生忘れられないだろう。例えるなら、悲しみと迷いと多少の怒りが入り混じったような。プラスの要素は入っていなかったと思う。

「そうなんだ・・・頑張つて・・・るんだね」

迷うような、言葉を搜すような。それが彼女の言いたいことではないと、僕が気付いていればあるいは・・・。

「もうすぐだしね。頑張つてね」

「ありがとう、ごめんね、寝ちゃって」

「ううん、いいの。頑張っているんだから、仕方ない・・・よね」
そういいながら、彼女は話を打ち切るように立ち上がった。

「ご飯、やっと出来たからさ、食べて。ね?」

「うん、そうするよ」

僕の言葉に、彼女はにっこりと笑って、それから鍋をコタツの上にとんと置いた。

「はい、肉ジャガ」

僕の目の前に彼女の言う「肉ジャガ」が現れた。それを見た僕は、

思わず二度見してしまった。

たつぷりと張られた濁った出汁の中で、細かく切られた牛肉が泳いでいる。そのわりに玉ねぎだけは妙に大降りに切られ、その鍋の中で一番の存在感を見せていた。そしてその表面に浮かんでいる白葱。ジャガイモは？おそらく火にかけられ泳いでいるうちにどんどん砕けていったのだろう。そう言われれば見えなくも無い、と言うレベルの欠片がちらほらと見受けられる。

美智子の得意げな表情と、鍋の中の完成品を何度か見比べ、僕はしばし言葉を失った。僕も肉ジャガを作ったことは無かったけど、定食屋やテレビなんかで肉ジャガと呼ばれているものとは明らかに別物だ。どうして美智子はこんなに自信満々なのだろうか。

「はい、どうぞ」

美智子が器によそって手渡してくれたそれを、僕は若干恐々とした面持ちで口に運んだ。美智子はそれをじつと見つめていた。味は思っていたほど悪くなかった。

「美味しいね」

僕は素直にそういった。美智子の顔は、味に自信があったからなのだろうか。それとも、比較的美味くできた部類に入っていたのだろうか。・・・想像していた「肉ジャガ」とは少し違っていたが、ご飯にもよく合ったし、上出来だったと思う。ちゃんとお代わりもして、鍋を空にした。それを見た美智子の嬉しそうな表情は今も忘れられない。

キッチンで片づけをする水音を聞きながら、僕は食事の余韻を味わっていた。そうしているうちに、ある思いがむくむくと頭をもたげてきた。

「俺も料理しようかな」

僕はふとそんなことを呟いた。うちの設備でも、材料さえそろえれば出来ることがわかったし、インスタントラーメンよりも美味しい。もちろん、最初から上手くはできないだろうけど、いろいろと

作れるようになるのは面白そうに思えた。

「なあに？私の仕事を取っちゃう気？」

キッチンでの片づけを終え、コタツに入りながら美智子は僕にそういった。

「いや、これからの生活で、ずっとインスタントってのも芸が無いからさ」

彼女の言葉の意味がよくわからず、僕は考えていることを素直に口にした。

「・・・じゃあ、上手に作れるようになったら食べさせてね」

その声は、きつと酷く寂しげだったことだろう。けれど、そのときの僕は初めての料理で何を作るか、そればかり考えていたから、何も気がつかず能天気に戻事をしていた。

「おう、びっくりさせるぜ」

僕がおどけて面白い、それから二人で笑った。それが、彼女がうちへ来た最初で最後の夜になった。

翌朝、彼女は来たときと同じ駅から帰っていった。

「卒論、頑張つてよね」

彼女はそう言いながら、改札の向こうへと歩いていった。何度か後ろを振り向いていたのは、ひよっとしたら僕が引き止めるのを待っていたのだろうか。残念ながら、僕はそれに気付かず、彼女に向かって手を振っていたわけだが。

それから、僕の忙しさも本格化した。卒論のためにあちこちの図書館を駆け回り、合間で授業に出る。後輩だろうと先輩だろうと使えるものは端から使い、卒業に向けて僕は必死だった。彼女からの連絡が途絶えていることにも気付かないまま、やがて何ヶ月かが過ぎていった。

十二月も末が近づき、僕は卒論の提出を無事に一番で終えた。満足のいく出来ではなかったが、大学院でも引き続き同じテーマを扱

うつもりだったから、とにかく提出を優先した。口頭試問では叩かれるだろうけど、それはまあ自業自得ってことで。

卒論が終わると、あっという間に気が楽になった。卒業が決まったわけではないのだけど、卒論に比べたら十枚そこのレポートや、講義内容そのままのペーパーテストなんて怖くも何ともない。資料を求めて東奔西走することもなくなり、自動的に再び時間が戻ってきた。

試験の合間やレポートを書く骨休めに、僕はこれから始める料理のことを考えていた。はじめに何を作ろう、彼女に何を食べて貰おう。そんなことばかり考え続けて、卒業に向けての作業も片手間に、本屋で料理本を立ち読みしたりしてみた。この手の本が意外と高いと知ったのはこのときだ。

結局、初めて食べてもらう料理を僕は肉ジャガに決めた。当て付けに近いが、どんな本を見ても彼女の料理は「肉ジャガ」では無かった。我流と言っていたし、僕がうまく作って見せて、コツなんかを教えたなら、びっくりしてくれるかもしれない。虫のいい考え方だったけど、とにかく僕はそうすることにした。

年が明けて、卒論の締め切りが過ぎ、試験も全日程を終わらせた。後は口頭試問を待つばかりだったある日のこと、彼女からの封書が届いた。

細かい彼女の字でびっしりと埋め尽くされた便箋。それには、端的に言えば別れの言葉が書かれてあった。

僕のは好きだったし、好いて貰っているのも分かっていたから、できればずっと一緒に居たかったと書かれていた。僕が卒論と格闘している間、彼女は随分と寂しい思いをした。だから無理矢理会いにいったけど、あなたはあんまり寂しかったようには見えなかつたと書かれてあった。それどころか、勉強に打ち込むあなたはとても充実しているようにすら見えたと書かれていた。

このまま来年になれば、今度はこっちが卒論で忙しくなるし、あ

なたも大学院に進めば今以上に勉強に割く時間が多くなるでしょう。来年はそれでよくても、私が働き出せば会う機会はもっと減るでしょうと書かれていた。

初めてあなたに会ったとき、いろいろと共通の話題もあったし、考え方も似ているように感じた。理想の人かもしれないと思ったと書かれていた。

だけど、今回のことで一人でいる間に価値観のズレを感じさせられた。だから、二人の価値観にどれぐらいのズレがあるのか、それを確かめたかったと書かれていた。

結果として、僕と彼女の間にある隔たりは、彼女にとって耐えるものではなかったということなのだろう。眠っていたことについては、それ自体よりも理由のほうでショックを受けたと書かれていた。時期的なものもあるだろうけれど、あなたの中での勉強、あるいは研究と言うものに負けた気がしたと書かれていた。

「あなたと私では、目指す道に違いがありすぎたように感じました。これからは、それぞれの道を歩いていきましょう。こんな手紙を書いている私が言うのもなんですが、あなたはいいい人だから、きつと幸せになれると思います。それでは、さようなら」

最後は、こう締め括られていた。

その文面に目を通したとき、僕の頭の中にはあの日のことが色々と流れていった。間抜けな話だが、彼女に答えを突きつけられるまで、僕は問題を解かされていたという実感すらなかったのだ。

結局僕は届いた手紙に長い返事は出さなかった。ただ、葉書に「分かりました、ありがとう」とだけ書いて送った。何を言っても嘘くさくなるのは明白だった。事実、あの頃僕は研究が楽しかった。それに、彼女はすでに結論を出したのだから、それに口を挟んだ所で、今更どうなるものでもないときの僕は思ったのだ。

第六話・完結

「あー、美味かった」

柳沢は本当に満足そうにそう言って箸を置いた。大きめの器に入れていたと思っていた肉ジャガは全て彼の腹に消え、汁すらも残っていない。

食べさせる人がいなくなった。そう思ったけれど、結局僕は料理をするようになった。手作りの味は、それが自分で作ったものならば尚更だが、インスタントやコンビニの味など問題にならない満足感を与えてくれる。それを教えてくれたのは美智子だった。これがレストランならばそうも行かないだろうが、所詮は素人料理。味が良ければそれで充分だということを、自らの腕で証明してくれた。

それと、もう一つはやっぱり美智子に未練があったのだ。どんなに気取ってみたところで、彼女と過ごした期間は僕の心にしつかりと刻まれている。ある日、またひょっこり連絡があるかもしれない。そのときに、僕が料理をしていなかったら、彼女が寂しい顔をするかもしれない。そんな思いもあった。もちろん、心のどこかで、そんなことは無いと分かっている。

彼女にとっては確かめる術が無いので分からないが、僕にとってある種の幸いだと思えたのは、彼女との物理的な距離が離れていることだった。偶然ばったりとか、彼女と他の男が仲良く歩いている姿とか、そういうのを見る確立は、限りなく低いと言えるだろう。

腹をさすりながら、暫く窓の外を眺めていた柳沢だったが、伸びを一つすると口を開いた。

「んー、腹も膨れたし、どっか遊びに行くか」

「どっかって、どこだよ金も無いくせに」

柳沢の無責任な発言に、僕はすかさず先手を打った。

「そうだなあ、まあとりあえず、外に出てみればいいんじゃない？ 天気も言いし、なんか思いつくだろう」

彼のこういう性格は羨ましいと思うことがある。あの時、僕がもう一步踏み出して彼女に色々と尋ねていれば、もう少し解決策を探すことが出来たかもしれない。例えば、慌てて電話を試してみるだけでも、ひよっとしたら彼女が今隣にいる未来に進めたかもしれない。今でも、そう思うことがたまにある。

そして同時に、そういうことをしなかった時点で、僕と彼女の道が分かれていたと納得した自分がいたのだと思う。

「しょうがない奴だなあ。行き当たりばったりでさ・・・」

「いいんだよ、今だけだ。そのうち、嫌でも落ち着くときが来るんだから」

「・・・なるほど」

僕は、片付けるからちよつとだけ待つように柳沢に言って、食器を持って立ち上がった。キッチンで洗い物をしながら、ふとあの時聞こえていた音を思い返してみる。きつと、鍋を拭き零したり、包丁を床に落としたり、いろいろと格闘したのだらう。料理をしていた時間と同じぐらい、片付けにはかかったのではないだろうか。今になって、やっとそういうのが分かってきた。ふと、笑ってしまう。

「何、一人で笑ってるんだよ気持ち悪い」

いつの間にか柳沢がキッチンを覗き込んでいた。せつかちな奴だ。「早くしろよ。日が暮れるぞ」

「分かったよ」

僕の返事に、柳沢は一つ頷き、部屋のほうに戻っていった。全くせつかちな奴だ。

あれから六年、彼女とは一度も連絡は取っていない。どこかで幸せに暮らしているのなら、それに越したことは無いと思う。けど、もし僕と彼女の道がもう一度交わることがあれば、そのときには是非僕の作った肉ジャガを食べさせてやりたい。きつと彼女は驚いてくれるだろうな・・・。

そんなことを考えながら、僕は蛇口を捻って水を止めた。

肉ジャガ

了

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6708c/>

肉ジャガ

2008年8月30日11時23分発行